

よりよく生きようと、自己の生き方について考えを深める子どもの育成

小 学 校 辻 健一

研究協力者 太田 佳光（愛媛大学）

1 主題設定の理由

道徳教育の要である道徳科の学習で養う資質・能力は、道徳性である。そのためには、多様な価値観に触れることが大切である。価値観とは、その人が持っている「様々なことに対する考え」であると捉えている。日頃生きていく上で、私たちは選択、判断を繰り返して生きている。例えば、満員の電車で座席にいた時に、重そうな荷物を抱えた高齢者が乗ってきたとする。どうしようか考えている時点では、声を掛けようか、黙ったままいようか、といった選択肢がある。その中で、重い荷物を持って大変そうだから、声を掛けて席を譲ろうとか、何も自分が声を掛けなくても他の誰かが席を譲るかもしれないから、しばらく様子を見ようなどと、考えを巡らせるであろう。そして、「席を譲ろう」「黙ったままでいよう」などと判断するわけだが、その判断には何かしらの根拠が存在する。「席を譲る」と判断した理由を尋ねると、「自分よりも相手の大変さを少しでも軽減したいから」と相手を思いやる気持ちからであったり、「電車は公共の乗り物だから、互いに助け合うことが大切だと思ったから」とみんなが使う場所でのマナーとして、気持ちを考えたからであったりと、同じ選択をしても、そう判断した理由は人それぞれで、多様である。その根拠の中に、その人の価値観が表れている。授業を通して多様な価値観に触れるということは、行為の背景にある根拠にまで掘り下げていくことでいろいろな考えに触れるということである。それにより、自分一人では気付くことができなかった考えに出合い、触発されてこれまでの自分の価値観について再考することができる。

その中で、自分がこれまで持っていた価値観について「間違っていなかったんだ」とより確かなものにしたり、「自分はこれまで何気なくしていたことにはこんな意味があったんだ」ということに気付いたり、他者の意見を聞いて、考えが変わったりする。このような過程を経て、最初に自分が考えていたことについてもう一度よく考え、自分が納得できる考えを導き出す。

これが、私たちが道徳科において目指している「よりよく生きようと、自己の生き方について考えを深める」姿であると考えている。こうした授業を積み重ねていくことで、自己の生き方について考えを深める楽しさを味わい、よりよく生きていくために更に考えを深めたいと感じてほしい。そして、少し立ち止まってどうすればよいかを考えて行動することができる子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。

2 道徳科における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐ道徳科の授業づくり

ア 道徳科における「深い学び」とは

私たちは、道徳科の学習を通して、子どもが「話し合って、いろいろな考えを知ることができた」「学習したことをこれからの生活に生かしたい」といった「学習してよかった」という思いを持たせたいと考えている。道徳科において「深い学び」について以下のように捉える。

道徳的価値にかかわる問題について、自己を見詰め、他者と交流を通して、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学び

道徳科において、まず道徳的価値にかかわる問題に対して、子どもが「考えてみたい」「みんなと話してみたい」といった思いを持つことができるようにしていくことが、「深い学び」へと誘う第一歩である。教師の思いが強すぎて、子どもの思いとかけ離れた授業になってしまうと、私たちが目指す「深い学び」にはならない。「登場人物と似た経験があるから、気持ちが分かる

な」「自分だったら、それはできないだろうな」「この登場人物は、どうしてそんなことができたんだろう」「みんなで考えてみたい」といった、子どもの思いに寄り添いながら学習していくことで、子ども（自分）が学習材（教材、経験等）とつながっていく。

そして、物事を多面的・多角的に考えるには他者とのかかわりが不可欠である。互いに考えを言い合うだけではなく、様々な面から見たり、立場を変えて見たりして、自分の考えと比較しながら対話していくことで、子どもと他者がつながっていく。

このような学びを経て、自分自身と向き合い、自分の考えに自信を持ったり、自分の持ち得ていない価値観に出合い、考えを新たにしたりしていくことが、自己の生き方について考えを深めることにつながる。そうした一連の学びを道徳科で目指す「深い学び」として捉え、研究を進めていく。

イ 子どもと共に学びをつなぐ道徳科の授業

私たちが目指している授業は、子どもが、「これってどういうことなの」「みんなで話してみたい」「私はこう思うけれど、みんなはどう考えるんだろう」といった子どもの内から出てくる疑問や思いを大切に、子どもが主体となって学習を進めていくことである。そうした子どもの思いや考えの流れをくみ取り、子どもと「学習材」、「他者」、そして「自分自身」とがつながるようにする。つまり、教師の役割は、子どもと「学習材」や「他者」、「自分自身」とがつながるように橋渡しをするということである。では、子どもと「学習材」、「他者」、「自分自身」と学びをつなぐとはどういうことなのかを（図1）に示す。

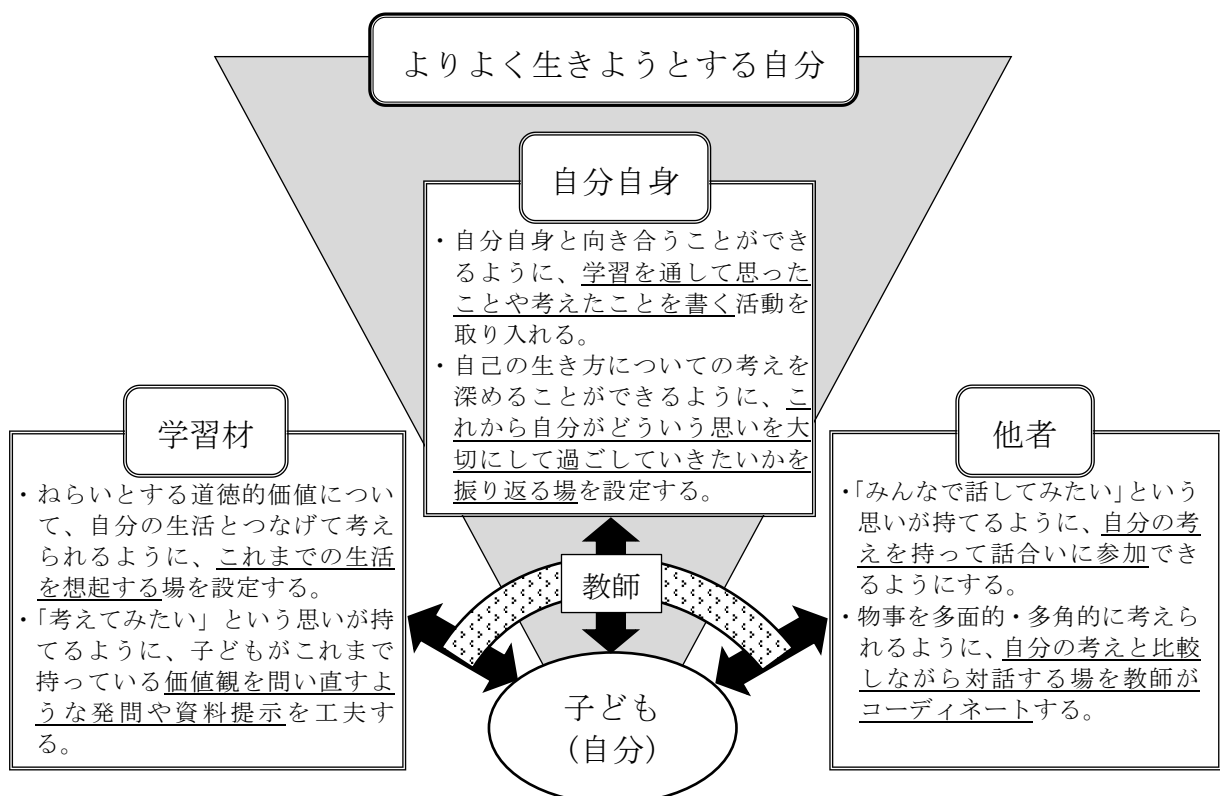


図1 子どもと共に学びをつなぐ道徳科の授業イメージ

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア 子どもと「学習材」をつなぐ手立て

- ねらいとする内容項目と関連のある写真を提示したり、疑似体験をしたりして、自分の生活や考え方を想起しやすくする。
- 普段何気なくしていることについて、どうしてそうするのかを尋ね、これまで持っている価値観を問い直したり、自分の持っている価値観を確認したりする。
- 教材のポイントとなる言葉や挿絵を提示し、「その気持ち分かるな」「自分にも似た経験がある」といった思いを大切に、自分のこととして考えられるようにする。
- 子どもが考えたいと思えるような問いをつくり、自分の持っている価値観とのずれに気付くことができるようにする。

道徳科における「見方・考え方を働かせる」ということについて、以下のように捉える。

様々な事象を、道徳的諸価値の理解をもとに、自己とのかかわりで多面的・多角的に捉え、自己の生き方について考察すること

ここで大切にしたいことは、ねらいとする内容項目について「自己とのかかわり」で考えられるようにすることである。そのため、ねらいとする内容項目に関連するこれまでの自分の生活を想起させることで、過去の自分自身を振り返り、自分と学習材がつながるようにする。また、自分の持っている価値観とのずれに気付くことで、主体的に学習に取り組むことができるようにする。

イ 子どもと「他者」をつなぐ手立て

- 小集団による話し合いを行い、どうしてそのように考えたのかを子ども同士で互いに聞き合う場を設け、自分の考えを確かなものにする。
- ファシリテーション・ツール（ホワイトボード、付箋紙、タブレット端末等）を活用して、自分の考えとの共通点や相違点を比較しやすくする。
- 全体の話合いでは、教師が根拠を問うなど問い返し発問を行い、行為の背景にある思いについて考えるようにする。

ここで大切にしたいことは、多様な価値観に触れることである。子どもが自分の考えを持つことができると、「他の人はどのように考えているのだろう」「自分の考えを他の人にも聞いてもらいたい」といった思いを持つようになるだろう。そうした子ども自ら「話したい」「聞きたい」という思いを持って話し合いを行うことで、自分と他者がつながっていく。そのために、自分の考えを持つ時間を確保できるようにする。さらに、できるだけ多くの子どもが学習に参加できるよう、小集団での話し合いを取り入れる。そのときに、子どもたち自身で話し合いが進められるよう、相手の考えを受け入れることや「どうして？」などと相手の考えについて深く尋ねることを確認したうえで、ファシリテーション・ツールなどを用いて話し合いを進めていくようにする。

ウ 子どもと「自分自身」をつなぐ手立て

- 学級での話し合いを振り返って自分が納得できる考えを書いたり、表現したりする活動を取り入れ、自己を見詰める場を設ける。
- 振り返り時の言葉掛けを精選し、道徳的価値についての見方・考え方の変容に気付かせたり、自己の生き方についての考えを深めさせたりする。

ここで大切にしたいことは、「自分はこんな考え方をするんだな」「〇〇さんの考えを聞いて、なるほどと思った」「自分も真似したい」といった自己の生き方についての考えを深めることで

ある。そのために、学習を通してどのようなことが分かったか、どのようなことを考えたのか、これからどのようにしていきたいかといったことをワークシートに書くようにする。書くことによって学習したことについてじっくりと向き合いながら、ちょっと先の未来の自分自身を想像し、よりよく生きていこうという前向きな気持ちが持てるようにする。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

「深い学び」が実現できたとき、次のような子どもの姿が表れると考える。

- 自分のこれまでの経験と重ねながら、問題について考えようとしている。
- 多様な価値観に触れ、自分の考えに自信を持ったり、自分が持ち得ていない価値観に出合ったりして、考えを広げ深めようとしている。
- 自己を見詰め、これから自分がどういう心持ちで過ごしていきたいかを考えようとしている。

こうした姿が表れているか、指導者評価と子どもの自己評価の二つの側面から見取っていく。指導者評価として、空間軸（ワークシート、ファシリテーション・ツール、発言）をつなげ、子どもの思考の深まりを見取るようにする。時間軸（授業後、学期末）をつなげ、子どもの考え方の変容や成長の様子を見取るようにする。子どもの自己評価として、学習を通して考えたことを自分の生活にどうつなげたいかや、学習に対する取り組み方はどうであったかを評価するようにする。その際に、教師はどのような視点で見取り、子どもは何を自己評価するのか以下に示す（図2）。

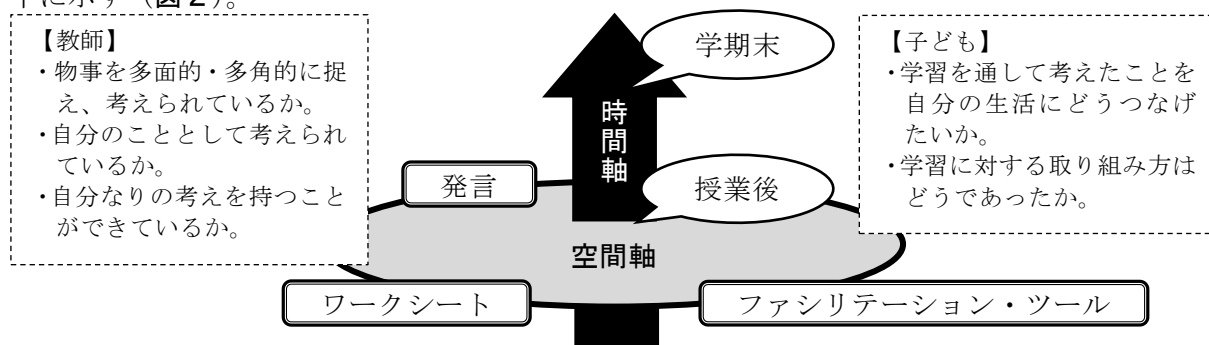


図2 評価の視点

イ 評価の具体的な手立て

(ア) 空間軸から見た手立て

「深い学び」に達したかどうか、ワークシート等の記述を中心に見取る。記述の際には、学級で話し合ったことやこれまでの自分の経験と重ねて考えたこと、他の人の考えを聞いて考えが変わったこと、道徳的価値についての見方や考え方の変容などを書くように伝える。

(イ) 時間軸から見た手立て

学期ごとに、書いてきたものを読み返したり、複数回取り扱った内容項目について比較したりして、これまでの授業を振り返る時間を設ける。そして、印象に残っているものはどれか、その時の自分と今の自分とを比較して、考え方に変化があったことなどワークシートに書くように伝える。

(ロ) 子どもが自己評価をする際の手立て

自分の学び方について振り返るために、ワークシートに、新しい見方や考え方を知ることができたか、自分の生き方について考えることができたかなどを振り返る項目を設ける。また、記述欄を多く設け、自己の変容やこれからの生き方について書くことを通して、自分の感じ方や考え方を客観的に認識することができるようにする。

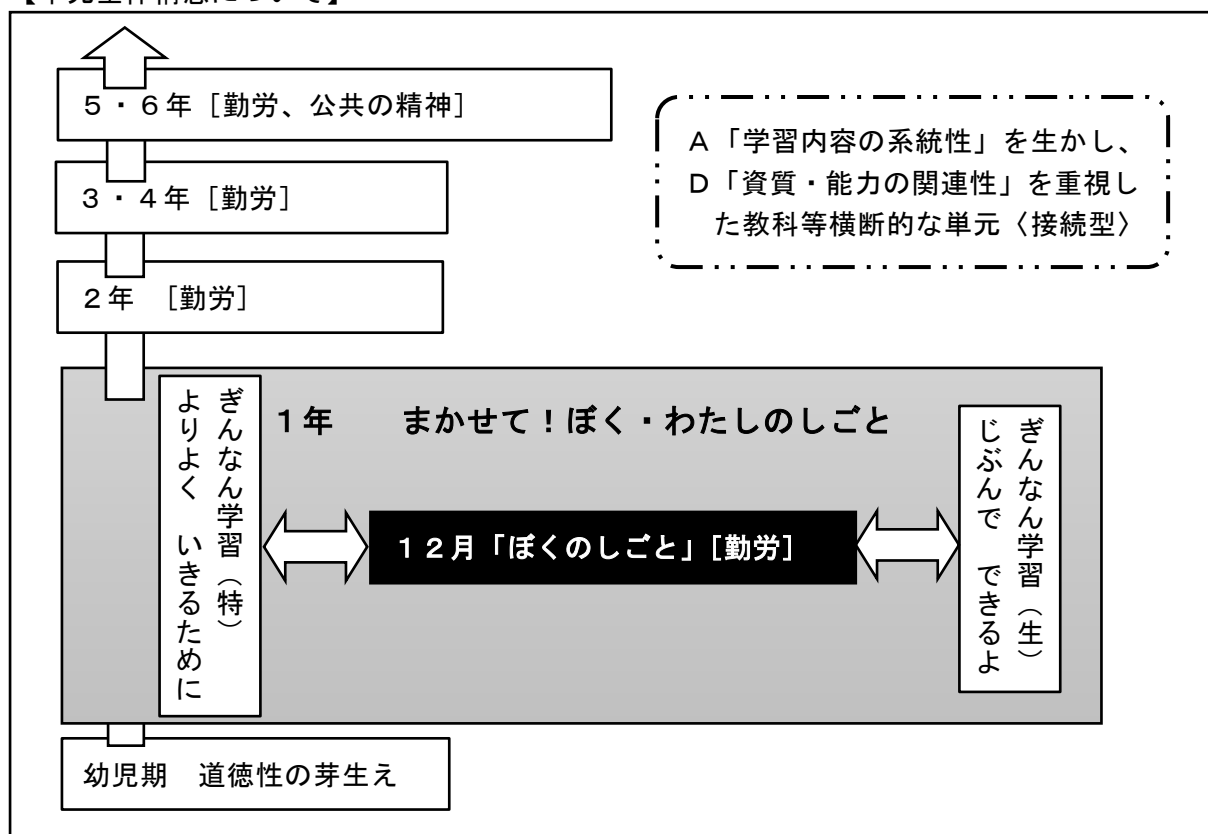
(辻 健一)

3 実践事例

第1学年

「まかせて！ぼく・わたしのしごと」 道徳科（+ぎんなん学習）

【単元全体構想について】



本単元は、道徳科における内容項目「勤労」を中心に構想した。「勤労」とは、自分の務めとして心身を労して働くことである。勤労は、人間生活を成立させる上で大変重要なものであり、一人一人がその尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、社会生活の発展・向上に貢献することが求められている。将来の生き方について考えるとき、自分の務めとは何か、将来就きたい職業とは何かについて考えることになる。職業には、自分の幸福を追求するため収入を得て個人や家庭の生活を維持するという面と、社会の中で一定の役割を果たして社会を支えるという面があり、共に重要である。同時に、自分の能力や個性を生かして自らの内面にある目的を実現するために働くという職業を使命として捉える考え方もある。職業は、一人一人の人生において重要な位置を占めており、人は働くことで誰かの役に立ったり、充実感を味わったりして生きがいを感じ、社会とのつながりを実感することができる。働くことの意義や役割を理解し、それを現在の自分が学んでいることとのつながりで捉えることは、将来の社会的自立に向けて勤労観や職業観を育む上でも大切なことである。

本学級は、素直で明るく、進んで手伝いができる子どもが多い。自分のものではなくても落ちているごみを進んで拾ったり、トイレのスリッパを並べたり、協力してノートなどを配ったりと、みんなのために働くことを楽しいと感じている。どうしてそうするのか尋ねてみると、「ごみが無くなると、気持ちよく過ごせるから」「次の人がスリッパをはきやすくなるから」などと話してくれた。それを聞いた周りの子どもたちは、自然と拍手を送っていた。自分のした何気ないことがみんなから認められる、役に立つことができたと実感することで、みんなの役に立てるよう頑張りたいという思いが高まり、働くことのよさを理解することにつながる。

う。そのような実態の子どもたちに、「自分が働かなくてもいいのに、どうしてそんなに頑張ることができるのか」を尋ねることで、働くことについて今一度考え直し、みんなの役に立てることがうれしいといった、現段階での子どもたちなりの考えが持てるようにしたい。

道徳科において、本教材では、家庭での手伝いの場面を取り上げている。これまでに取り組んだことのない手伝いに最初は戸惑いを感じながらも、親子で一緒に風呂場の掃除をしていく中でコツをつかみ、自分だけでもできるようになって、家族から認められるという内容である。子どもたちの生活の基盤である家庭において、自らできることを行い認めてもらえることは、役に立ててよかった、もっとがんばろうという、働くことのよさを実感できる源となる。それを、家庭以外の生活にも広げ、みんなのためにできることを進んでしようとする気持ちを高めることのできる教材である。

そうした働くことについての学びを生かし、発揮できる場として、ぎんなん学習（生活科）「じぶんでできるよ」の学習へつなげていく。冬休みも生かし、家庭で自分にできることを見付け、継続してやってみる中で、働くことの大変さや、やり終えたときの充実感などを味わうことができるようにする。

さらに、その学びを生かし、発揮する場として、ぎんなん学習（特別活動）「よりよくいきるために」の学習へとつなげていく。学級のために、自分にできることは何かを考える活動を行う。これまでの生活を振り返り、自分の役割を見付け、実際にやってみることで、学級のみんなの役に立っていることを実感するとともに、自分が働くことで、よりよい学級になるように支えていることに気付くことができるようにしたい。

【単元（道徳科）のねらい】

働くことのよさを理解し、みんなのために進んで働こうとする態度を養う。

【単元における指導の工夫】

場面	三つの場面ごとの子どもと「つなぐ」指導の工夫（学習材・他者・自分自身）
出 合 い	自分は学級のためにどんな仕事をしているか振り返ることで、仕事に対する自分の持っている価値観を確認できるようにする。（学）（自）
追 究	- ポイントとなる言葉や挿絵を提示し、「その気持ち分かるな」「自分にも似た経験がある」といった思いを大切に、自分のこととして考えられるようにする。（学） - 自分の考えを持って話合いに参加できるように、考えを付箋紙に書く時間を確保する。（学）（他） - 全体の話合いでは、教師が根拠を問うなど問い返しの発問を行い、みんなのために働くという行為の背景にある思いについて考えるようにする。（他）（自）
振 り 返 り	- 終末に自分が納得できる考えを書く活動を取り入れ、自己を見詰める場を設ける。（自） - 教材を生かして、家族のためにできることを考えることで、ぎんなん学習へとつながるようにする。（自）

【単元の実際】（下線は指導の手立て）

「出会い」

- 自分は学級のためにどんな仕事をしているか振り返ることで、仕事に対する自分の持っている価値観を確認した後、教材を提示した。

T： 月組でどんな仕事してるかな。

C： ハッピーやたい係で、くじびきやおもちゃを作って、みんなに楽しんでもらっているよ。

C： 保健当番で、怪我した子や調子の悪い子を保健室に連れて行ったり、先生に知らせたりしているよ。

C： 勉強。（それ仕事なん？）そうよ。

T： 今日のお話は、そんなお仕事に関するお話です。

「追究」

- ポイントとなる言葉や挿絵を提示しながら、「その気持ち分かるな」「自分にも似た経験がある」といった思いを大切にして、自分のこととして考えられるようにした。

T： お母さんに「おふろばそうじ、一緒にやってみようか。」と言われたとき、ぼくはどう思ったかな。

C： 初めてだからドキドキした。

C： できるかな。けがしないかな。どうやってするのかな。

T： 「やったあ。」と喜んだぼくは、どんなことを考えていたかな。

C： うれしかった。

T： 何がうれしかったのかな？

C： 掃除をすることがお仕事になったから、うれしかった。ほめてもらえたし。

C： お母さんがプロと認めてくれた。がんばった甲斐があった。

- 頼まれた仕事を率先して行うことで、働くことに対するやりがいに意識が向き始めていた。ここで、働くことに対して自分のこととして更に考えを広げ、多様な価値観に触れられるように、対立する考えを提示した。

T： （対立キャラクター登場）この仕事は、ひろきじゃないといけないのかな？ひろきだって、なわとびの練習や勉強などすることはたくさんあるよ。できる人に任せたらどうかな？

C： 確かにだれでもいい。ひろきでなくてもいい。

T： ダークみきやんの話聞いてどう思った？

C： そんな考え、思いつかなかった。

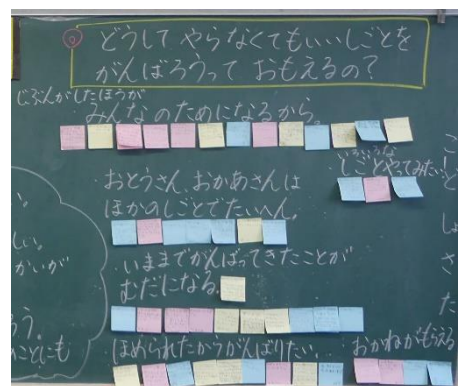
C： けどもったいない。

C： 悪いと思った。（なんで？）ママが忙しくなる。仕事が増えちゃう。

- じっくり考えられるように、子どもと相談をして「どうしてやらなくてもいい仕事を頑張るのか」についての考えを付箋紙に書く活動を取り入れた（写真1）。その後、出てきた考えを整理しながら全体で話し合いを行った（資料1・写真2）。



写真1、2 付箋紙に書き、話し合う様子



資料1 出てきた考え

「振り返り」

- 学級での話し合いを振り返って、自分が納得できる考えをワークシート「にこにこ日記」に書く活動を取り入れ、自己を見詰める場を設けた。

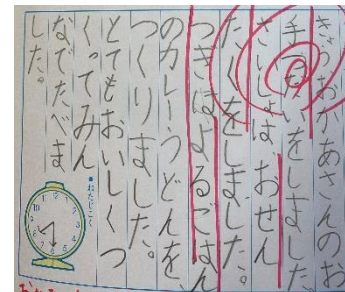
- ・ ひろきは、前は遊びたい気持ちがあったかもしれないけれど、掃除をして、ほめられることもうれしいし、掃除をすること自体も楽しいのかなと思いました。
- ・ お父さんやお母さんが掃除をしてもらっても気持ちがいいけれど、自分が掃除をしたらもっと気持ちがいいのではないかなと思いました。
- ・ これまでがんばってきたことが無駄になってしまうから、自分が掃除をした方がいいと思いました。
- ・ お父さんやお母さんはいろいろな仕事があって忙しいから、自分が頑張って役に立ちたいのかなと思いました。
- ・ 働くことは、みんなのためになるから、楽しくできたらいいなと思いました。
- ・ わたしも、家とかで自分ができる仕事を探してみようと思いました。

- 最後に、これまで自分たちが行っていた手伝いをしている様子や日記の内容を紹介した(資料2、3)。

本時と同じように、「どうして手伝おうと思ったのか」を尋ね、何気なく行ってきたことがみんなの役に立っていることを再認識し、自分の中にみんなの役に立っている自分がいることを自覚して、今後の生活につなげていけるようにした。



資料2 紹介した写真



資料3 子どもの日記

【単元の成果と課題及び次年度の実施に向けて】

- 「勤労」という道徳的価値についてじっくりと考えられるように、人間理解（道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解すること）に対応した考えを提示することで、多様な価値観に触れ、価値について深く考えられた。
- 全体での話し合いで、子どもから出てきた考えを整理したり切り返したりといった、教師のコーディネートについて、どこに向かえばいいのか見通しを持ち、板書と組み合わせながら構造的にまとめていく必要がある。
- ☆ 手伝いをする価値が「人のため」「自分のため」の二つに大別できるものだったので、黒板をファシリテーション・ツールの一つとして捉え、整理してまとめるように工夫していく。

4 研究のまとめ

道徳部では、「深い学び」を「道徳的価値にかかわる問題について、自己を見詰め、他者と交流を通して、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学び」と捉え、研究を進めてきた。

(1) 子どもの学びをつなぐ指導の手立てについて

ア 「出会い」の場面（主に「学習材」とつなぐ手立て）

- 教材について登場人物の心情などを押さえた上で、人間理解に関係する発問を投げ掛けることで、道徳的価値の漠然とした理解から一步踏み込んで考えることができていた。
- 「出会い」の場面で、これまでの生活を振り返ることで、道徳的な問題を見付けようとしていたりする姿が見られた。また、自分ごととして学習に臨むことで自己の生き方について考えを深めようとする態度が育ってきている。
- 内容項目について自分の持っている価値観とのずれに気付かせることで、主体的に学ぼうとする姿が育ってきている。
- 第1学年の実践では、事前に教材を読んでおくということが難しかった。発達段階に応じて、何について話し合いたいのかを把握した上で、子どもが考えたいと思えるような問いをつくることを検討したい。
- 「出会い」の場面で用いた写真やアンケート結果が、本時で扱う教材の内容と僅かな違いが出てしまうことがあった。「学習材」とのよりよいつながりに向けて、一つの内容項目について細分化した分析や見方をする必要がある。

イ 「追究」の場面（主に「他者」とつなぐ手立て）

- 第3学年の実践では、子どもが考えたいと思えるような問いを中心発問とすることで主体的に問題について考えようとする姿が育ってきている。
- 問い返しを精選したり、子ども同士をつなぐ問い返しを行ったりすることで、多様な見方に気付かせ、物事を多面的・多角的に考える姿が増えてきている。
- ファシリテーション・ツールを用いることで、自分の考えを持った上で共通点や相違点などを見付けて比べながら話し合うことができた。
- 子どもから出てきた考えを教師が整理していくことが難しかった。どのような視点で整理していけばいいのか、教材研究の段階で見通しを持っておくことが大切である。
- 教材を通して、子どもと共に自分たちが考えたいと思えるような問いをつくることに時間がかかることがあった。継続的な指導で、道徳的な問題を見付ける目を育てていきたい。

ウ 「振り返り」の場面（主に「自分自身」とつなぐ手立て）

- 毎時間自分の納得のいく考えをワークシートに残していくことで、教師は子どもがどのような考えを大切にしているのかを見取ることができるとともに、子どもは何を学んだのかを自覚することにつながった。
- 「振り返り」の場面での言葉掛けを精選することで、ワークシートに書く内容を整理させたり、道徳的価値についての見方・考え方の変容に気付かせたりすることができ、書いて振り返ることに対する抵抗を軽減することができた。
- 低学年の時期の授業の構成として、まず自分の考えを持つことに重点を置いたため、学級で考えをまとめたり、サークル対話を行ったりすることができなかった。発達段階に応じた指導の手立てが必要である。
- 教材の内容やその感想についてワークシートに書くなど、「自分自身」について十分に振り返ることができない子どもがいた。振り返りの視点を掲示するなどして、全ての子どもが平等に書ける手立てを工夫したい。

(2) 子どもと創る「深い学び」における評価について

ア 指導者評価の手立てについて

- 毎時間のワークシートに加え、学期末にこれまでの学習を振り返り、心に残ったことを書く活動を取り入れることで、「この学習はよく覚えているな」「今もこの考えを大切にしている」といった様子を把握することができ、深い学びへとつながっているかを見取ることができた。
- 長いスパンで道徳科における子どもの成長を見取っていくことはもちろん大切であるが、1時間の授業で深い学びが実現できたのか、多くを求めすぎず、スモールステップで評価を行っていくことが大切である。
- 授業内の様態や発言など、空間軸で見取ったものの蓄積や評価が難しかった。今後 ICT 機器の効果的な活用により、改善を図っていきたい。

イ 自己評価の手立てについて

- 同じ形式のワークシートを使って自分がどのように学んだのかを振り返ることで、無理なく進めることができた。
- ワークシート内に記述で振り返る箇所を設けることで、子どもが自分自身とじっくりと向き合うことができた。
- 形式的になってしまっているので、学期ごとに自分の学び方を振り返る場の工夫をするなどして、活用を進めていく。

授業内で「心にストンと落ちる瞬間」があれば、子どもにとって「深い学び」になっている。なぜなら「心にストンと落ちる瞬間」は、自己を見詰め、他者と交流を通して、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考える中で生まれるからである。そのような場面を子どもと共に創り出す喜びを感じることもあれば、「余計に分からなくなってきた」という授業もある。考えれば考えるほど、友達と話せば話すほど複雑になってくるのである。人間は成長に伴い、考えや人間関係が複雑になってくるものである。そう考えると、この「余計に分からなくなってきた」という場面も子どもにとっては大切なかもしれない。

心にストンと落ちることも成長、複雑になるのも成長。そのような構えで今後も子どもが成長する学びを子どもと共に創っていきたい。

